



ヴァイオリン・レッスン・ルーム

# 巨匠の伝言

第68回

演奏家の一曰

シマノフスキ：夜想曲とタランテラ③

ヴァイオリニスト

日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター

木野 雅之

URL : <http://www.masakino.com/>



## 演奏家の一曰

私たちは基本的には、毎日練習をするものであるが、一旦ツアーに出るとそうもいかないことがしばしばある。若い時には、それこそガムシャラにやってきたが、それなりにベテランにもなると、休むことも大切なこととなってくる。例えば、海外へのツアーなどでは時差があるので、コンディションを整えるための休息は欠かせない。

ツアー中の生活のリズムは、大抵、朝はまず出かけるまで練習をするか、体を休め、その後、次の場所への移動から一日が始まる。場所、環境が変わるだけでも大変なのだが、そうしたことは度重ねていくと慣れてくる。

また、ツアー中はどうしても宿泊するホテルの室内で練習を行なうことになるので、周りにも気を遣う。そのため、場合によっては早めに会場入りすることもしばしばある。

そうはいっても、どうしてもホテルで練習しなくてはいけない時には、弱音器や消音器を使うことになる。通常の弱音器なしで練習している時に比べ、楽器の響きは掴みにくいものの、自分の出している音をじっくり聴こうとする感覚がより一層働き、それはある意味大切な勉強である。

さて、会場に着いたらまず音を出してみよう。

環境が変わると、それこそまるで想像し得なかった響きや音質になることも大いにあり得る。

その場の湿度、温度にも気を遣おう。会場だけでなく、自分の楽屋、そしてもう少し注意するならばステージに立つ前の舞台裏も大切である。楽器は、ほんの短い間でも調弦が狂うなど大変繊細なものなので気をつける必要がある。もちろん弓の張り具合でもある。

いよいよステージの上である。十中八九まず感じるのはゲネプロの時とくらべ聴衆が入ると変わる音の響き方で、おそらくこんなはずではなかったと思うであろう。ホールの後ろまで自分の音がよく行き届いているか注意して聴くこと。そして、常に弦や弓の状態にも気を配ること。音程をこまめに合わせるなど、出来る限り良いコンディションで演奏することを心がけよう！

演奏後は楽器をよく拭いてからしまうのはもちろんであるが、最後に駒の位置をしっかりと見ておくこと。もちろん翌朝もだが、位置が一定していないと音にも大変影響するので、自分の楽器のベストポジションを常に知っておくことは必要不可欠である。

こうして演奏家の一曰は終わる。あとは旨い酒を頂くのみである。

## カロル・シマノフスキ Karol Szymanowski (1882~1937) ポーランド 夜想曲とタランテラ Nokturn i Tarantela Op.28

近年、ポーランドを代表する作曲家。R・シュトラウスやスクリャービン等のロシア音楽や印象派の影響を受け、第一次世界大戦後は新古典主義に進んだ。

毒蜘蛛、タランチュラに刺され、暴れ苦しむ様子から、その名のついたタランテラは、ナポリの熱狂的な舞曲である。「夜想曲とタランテラ」は、1914年に作曲された。この作品は彼のイタリア旅行の影響が反映された名作である。